

2020年11月29日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「主を待ち望む信仰」詩編130編1～8節

主任牧師 加藤 誠

**「わたしは主に望みをおき／わたしの魂は望みをおき／御言葉を待ち望みます。
わたしの魂は主を待ち望みます。見張りが朝を待つにもまして／見張りが朝を待つにもまして」
(詩編130編5-6節)。**

教会の暦でアドヴェント（待降節）に入りました。今日ともされた第一のローソクは「希望の灯」です。

「希望」とは何でしょうか。辞書を開くと「①こうあってほしいという願い、②将来の明るい見通し」とありました。「うーん、さてどうだろう…?」。イエス・キリストが届けてくださった「希望」は、このどちらの説明にも当てはまらないと思いました。イエス・キリストが私たちに手渡してくださった「希望の灯」を私なりに言葉にするなら、「私たちの心を照らし出し、明日に向かって生きる力を引き出してくれる光」と表現してみたいと思います。

聖書には、主イエスからこの「希望」をいただいた人たちがたくさん紹介されています。38年間寝たきりでベトザダの池の淵で暮らしてきた男性がいました（ヨハネ5章）。「誰も助けてくれない、自分など生きていても意味がない」と、虚ろな思いに心を覆われ生きることをあきらめていた人です。主イエスはこの人に「あなたは良くなりたいたのか?」と問いかけます。ずいぶんとストレートな問いです。けれどもこの問いが、彼の中にかろうじて残っていた命の種火を燃え立たせ、立ち上がらせていきます。主イエスを通して一筋の希望の光が彼の心を照らし出すと、彼はそれまで自分が寝ていた寝床をかついで歩き始めるのです。生きることをすっかりあきらめていた彼の人生は、主イエスの希望の灯に照らされて、「自分は生きていい!」と、明日に向かう力に満ちたものに変えられていったのでした。

また会堂長ヤイロは大切な娘を病気で失う絶望に突き落とされていました（マルコ5章）。「もう手遅れです。イエスさまが来て下さるに及びません」。ヤイロの心は神に対する深い落胆と失望、そして主イエスを途中で引き留めて貴重な時間を浪費し、我が娘に残されたわずかなチャンスを奪った女に対する怒りで満ちていたことでしょう。しかし主イエスはそんなヤイロに教えてください。「神に手遅れはない。神の御業はここから始まるのだ。神が起こされる希望の御業を見上げて歩む信仰をいただいでいきなさい!」と。どんなに手遅れで、可能性がゼロで、真っ暗闇に思えても、神の慈しみのまなざしが注がれる時、そこに希望の光に照らされた新しい命が起こされていくのです。「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている」（イザヤ43・19）。神が起こされる希望の御業に信頼して歩む幸いを主イエスはヤイロに教えてくださいました。

さて今朝、ご一緒に開いた詩編 130 編をうたっている詩人は「深い淵の底」(光の一切届かない真っ暗闇)にいます(1節)。6節では「見張りが朝を待つにもまして」と言っていますから、今、この人が目の前に見ているのは夜の暗闇です。けれどもこの人は、自分の訴えを確かに聞いてくださっている方が必ず夜明けをもたらしてくださることを知っています。「主に望みをおき、主を待ち望み、主の御言葉を待ち望む」というのです。今は、光が見えない。いつ朝日が昇って周りを明るく照らしてくれるのか、先がまったく見通せない。けれども、主なる神のもとにある「慈しみ」と「豊かな贖い」が私を立ち上がらせてくださる。それゆえにこの人は「深い淵の底」にありながら下を向いていません。絶望に沈んでいません。天を仰ぎ、上を向いて歩いています。「主を待ち望む信仰」は、暗闇の中に窓を開けて、神のもとにある希望の光を受け取っていく信仰です。私たちは自家発電で、自分の力で人生を明るく照らし出すことはできません。私たちはお金の力で将来の明るい見通しを確保しようとはしますが、お金で寿命を買うことはできないし、信頼の通い合う温かい人間関係を買うことはできません。お金では、厳しい病気に向かい合う、前を向いて生きる力を買うこともできません。明日に向かって生きる力は、豊かな慈しみと贖いをそなえておられる主なる神に向けて、私たちが心の窓を開けていくときに与えられるのです。

「わたしは主に望みをおき／わたしの魂は望みをおき／御言葉を待ち望みます」(詩編 130・5)、「イスラエルよ、主を待ち望め。慈しみは主のもとに／豊かな贖いも主のもとに」(同 7)。この豊かな慈しみと贖いを携えて私たちの間に生きてくださった主イエス・キリストを大切にいただいきたいのです。

さて、今年のアドヴェント。私たちはどのような祈りをもってクリスマスまでの日々を過ごすのでしょうか。新型コロナウイルスの感染拡大によって、今年はいつもととはまったく様変わりのクリスマスを迎えようとしています。クリスマスの賛美歌をみんなで大きな声で歌うことができないし、聖歌隊の賛美を聞くこともできない。クリスマスのチラシを配って「どうぞ教会にお出かけください」とご案内することもできない。クリスマスらしいことをほとんど「何もできない」、何とも寂しく、もどかしい思いにさせられています。けれども「何もできない」静かなクリスマスを通して、神さまが私たちに教え、気づかせようとされていることがきっとあるのだらうと思います。

「私は、主のみわざを思い起こします。昔からの奇しいみわざを思い起こします。私は、あなたのなさったすべてのことを思い巡らし、あなたのみわざを、静かに考えます」(新改訳 詩篇 77・11-12)。

イエス・キリストが私たちの間に生まれてくださった意味を静かに思い巡らし考え、大切に受けていく。神さまがクリスマスに求めておられる一番大切なものを見失うことがないよう、アドヴェントの時を過ごしていきたいのです。